町役場と大学の協働作業による SMIL を用いた 地域情報発信メルマガ

中挟知延子[1]

本論文では、群馬県板倉町役場と東洋大学で協働して発行している地域情報発信メルマガ「いたまぐ」について述べる。メルマガのコンテンツにはマルチメディア統合技術 SMIL によるストリーミング配信を取り入れて、写真、テキスト、音声、映像を組み合わせたものを用意している。メルマガコンテンツの編集は東洋大学国際地域学部のインターンシップ科目である「情報技術実務」の一環として、科目を履修する学生が担当している。８月には準備号を刊行して町民から購読者を募り、９月に創刊号を刊行した。将来的には読者からビデオの投稿を募り加工して掲載する予定である。本発表はその事例報告である。

A regional information mail magazine published using SMIL through the cooperative work of the Itakura Town Office and Toyo University

Chieko Nakabasami

In this paper, we report a regional information mail magazine, ‘ITAMAG,’ published through the cooperative work of the Itakura Town Office at Gunma and Toyo University. ITAMAG is a multimedia magazine, with photos, text, sounds and movies compiled synchronously using SMIL, Synchronized Multimedia Integration Language. The contents of the magazine are streamed via the Internet. The university students who edit the magazine register for an internship in information technology. Last August, a preliminary edition of the magazine was published, and readers in the Itakura area, near the university, were sought. The first edition was published in September. This work is ongoing, and in the future we plan to publish videos submitted by readers.

[1] **東洋大学国際地域学部**　Regional Development Studies, Toyo University

1. はじめに

筆者の勤める東洋大学国際地域学部では、2002 年度よりインターンシップ科目を設けている。インターンシップ科目には地域活動実習・経済社会実務・国際活動実習・情報技術実務の４つの種類があり、本稿における『町役場と大学の協働作業による地域情報発信メルマガ』と称する活動は情報技術実務に属する。情報技術実務の内容として、地域住民が身近な情報を共有し、それによって地域社会への興味を広げてもらうためのボランティア活動に先端の情報技術の実践を盛り込んだ内容を教員側から学生に提供することにした。ここでいう情報技術はハード・ソフト両面を含み、インターネット上でのマルチメディア統合技術である SMIL[1]を用いたデジタルコンテンツの配信を示している。情報技術実務は、町役場の担当者と協力して、マルチメディアコンテンツのストリーミング配信も取り入れたメールマガジン（以下、メルマガと略す）を発行することで、今年８月始めに準備号を配信して地域住民より登録者を募り、９月半ばに創刊号を配信した。準備号は HTML ドキュメントとして公開している。そのスクリーンショット[2]を図１に示す。配信は３ヶ月に２度の割合で行う予定で、随時登録者を募っており現在登録者は 125 名余りであり、本稿はその活動についての報告であると同時に現在進行中の活動において生じた問題や、地域社会への情報流通において解決されるべきことがらを論じる。情報技術も他の社会インフラと同様に、実際に社会へ適用して初めてその有用性や存在意義が明らかになると考えられる。以降、本稿ではインターンシップ活動内容の詳細を説明して、実際に学生たちの作った SMIL コンテンツを示す。一方で本稿で取り上げたメルマガの配信をデジタルコンテンツの地域社会への流通という観点から、問題点をあげて解決策について考察し、今後の展開を述べてむすびとする。

2. メルマガ配信活動の動機と協働の内容

筆者が情報技術実務の担当者となり、2003 年度の履修に向けて準備を始めたのは 2002 年度の２月後半である。地域社会へのボランティア活動の一環であることから、学生の活動内容は町役場と協働した地域へ資する情報システムの構築である。今回構築したシステムは地域社会のインフラとしての役割というよりは、地域住民のコミュニケーションの場を作るというものである。具体的にはメールマガジン（以降「板倉町メールマガジン」の愛称である「いたまぐ」と呼ぶ）の配信という形で、日頃見慣れてはいるが実際には詳しく知らない地域の身近な情報や、登録したメンバーならコンテンツの投稿ができてメンバー同士のコミュニケーションができることを目的としている。地域としては東洋大学国際地域学部がある群馬県板倉町とその周辺地域としており、配信するコンテンツは板倉町の地域情報を中心にしている。

板倉町役場にメルマガ配信について協働を申し入れたところ賛同の返事を得て、企画財政課の担当者が２人付くことになった。大学と役場の役割分担としては、大学側ではインターンシップ学生６人（国際地域学部３年生４人、同４年生２人）がコンテンツのデザインと配信を行い、役場側ではメルマガにつての地域への広報活動と取材のときのアポイントメント取り、および配信するコンテンツの提供者への確認を担当した。そしてコンテンツの作成については、学生と役場担当者が協働してこれにあたっている。

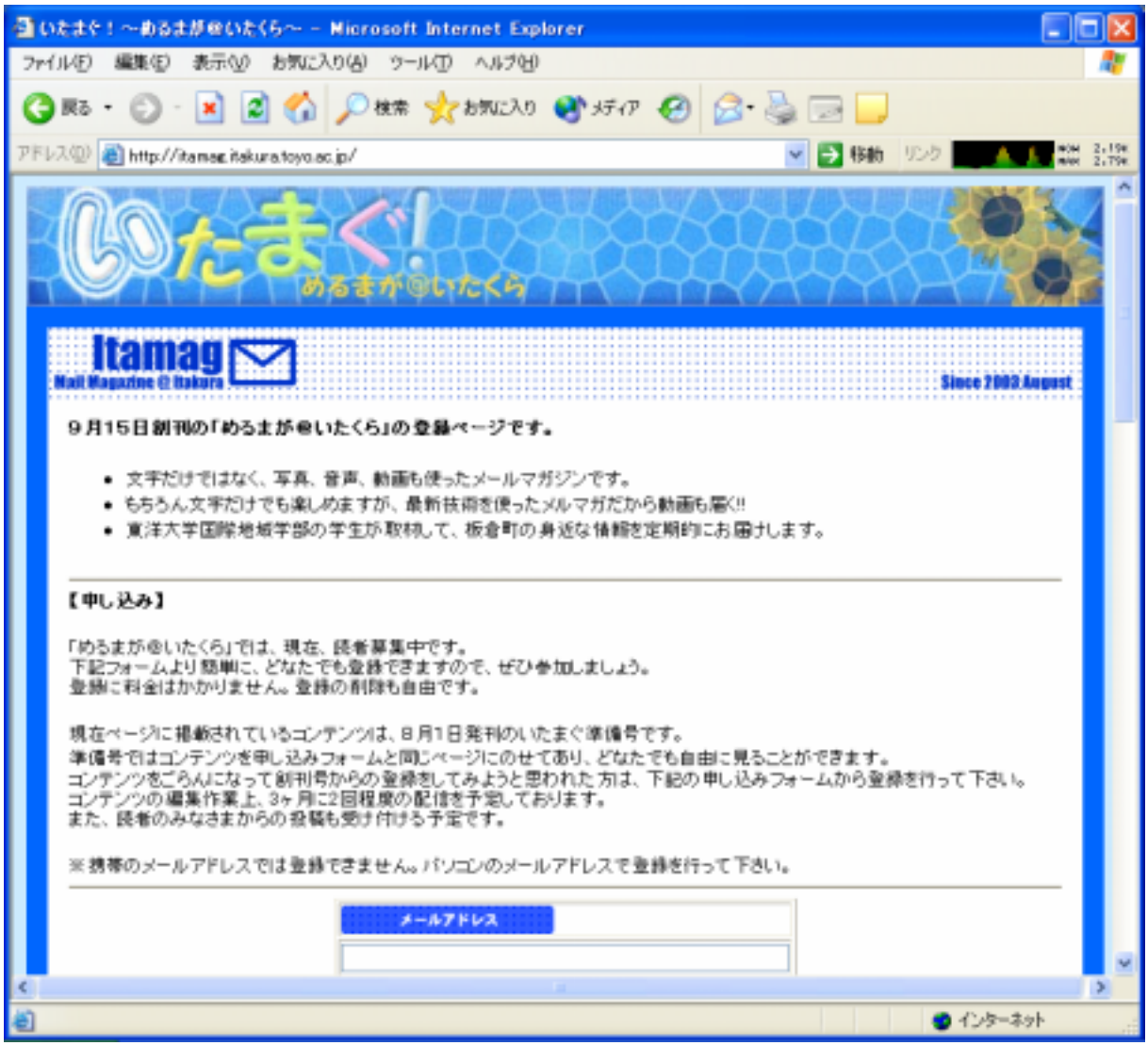

図１　いたまぐ準備号のメールアドレス登録画面

3. いたまぐのコンテンツの構成

いたまぐは以下の４つの項目で構成されている。

(1) 目次

(2) みんなのひろば

(3) SMIL で見る身近な板倉町

(4) ストリーミング映像で見る板倉住民の素顔

(2)の「みんなのひろば」はテキストによる文章が書かれている。(4)は取材においてデジタルビデオで撮影しビデオ編集ソフトで編集してストリーミング用に変換したものである。 (3)が SMIL コンテンツである。いたまぐでは(3)と(4)のコンテンツを区別しており、４では地域住民の生活に焦点をあててできるだけ問題がない限り住民を映像に登場させる。一方で(3)の SMIL コンテンツ

では、町の風景やイベントなどテキスト・サウンド・写真・映像を効果的に組み合わせたストーリー性豊かなテーマを選んでいる。

８月１日にいたまぐ準備号を刊行し現在に至るまで継続して読者を募っている。準備号では SMIL コンテンツとして板倉町の観光名所のひとつである「群馬の水郷公園」で催されている「揚舟ツアー」の様子を載せた。図２にそのスクリーンショットを示す。次に９月１５日に刊行された創刊号では「夢ファームいたくら～町田養蜂場」と題して、町にある農産物直売所の紹介と、そこに蜂蜜を持ってきて売っている養蜂場を営む住民の自宅を取材し、ミツバチの生態や蜂蜜を生産するしくみなどについて普段知りえないことがらが SMIL のコンテンツとして加工されて作られている。SMIL コンテンツは画像にテキストを自由にキャプションとして付けたり、音楽を効果的に加えたり、それでも説明が足りなければパワーポイントなどで作った説明図を挟むこともできる。現在使っているバージョンは 2.0 である。また作成が HTML ドキュメントを作った人間であれば極めて容易にできることから、今後より広いユーザ層への使用、たとえば小学生などにも社会や理科の自由研究のレポートを SMIL で作らせることも可能性もあろうかと期待できる。

図２　SMIL コンテンツ画面「揚舟ツアー」

4.　いたまぐ配信における問題

現在のいたまぐは創刊号が配信されており、３ヶ月に１度くらいの配信を予定して編集が進められている。いたまぐ配信計画が今年の２月から始まってから今までに生じたいくつかの問題について、地域社会へのデジタルドキュメントの流通という観点から述べる。

(1) 地域住民の中でのデジタルデバイド

板倉町ではブロードバンドから通常のアナログ電話回線の利用までさまざまなインターネットアクセスの形態が存在する。ストリーミング配信の場合、ナローバンドとブロードバンドの２つの配信を用意してコンテンツを公開している。通常の電話回線を使う家庭ではナローバンド用のストリーミングコンテンツを見ることになるが、コンテンツのクオリティがかなり落ちるために十分コンテンツを楽しむことができない。しかも ISDN とアナログ電話回線ではナローバンド用コンテンツですら常に見ることができるとは限らないことがわかった。SMIL コンテンツはその点を考慮して準備号と創刊号では動画を組み合わせていない。そうすることで SMIL コンテンツはアクセス環境のちがいを気にせずにどのユーザでも問題なく閲覧することができている。また、メール本文からストリーミングプレイヤーに直接リンクを張るのではなく、いったん HTML ドキュメントにリンクしておいて、そこにコンテンツの概要文を静止画と一緒に載せ、そのページからプレイヤーにリンクを張ることにした。

(2) 紙メディアとの共存

デジタルコンテンツの普及については、住民の間でも家庭でインターネットをしたことが全くないという人たちも年齢や職業によってかなり多くみられる部分があり、メールマガジンそのものを知らないとか興味がないなどという現象も見られる。今まで町の広報誌で必要な情報は事足りているように見受けられるが、デジタルコンテンツの流通が進んでいく現在においてそれらを蓄積し、後における 2 次的な利用の柔軟性を考慮するとその重要性も否定できない。そのためにも住民にデジタルコンテンツについて興味を持ってもらい、最初は受け取るだけでいいかもしれないが次の段階として住民自らコンテンツの作成に参加して貴重な町の生活の記録を残していくという形が望ましいと考える。住民と役場、大学との３者の協働によるデジタルコンテンツの流通形態が究極の姿であると主張したい。

いたまぐの宣伝について町役場の担当者と相談して行った方法は３つある。板倉町の月 1 回発行の広報誌へ載せることと町のホームページへの掲載、そしてそれら２つからいたまぐ準備号の Web サイトにアクセスすることによる口コミでの２次的な流通である。今回はそれらに加えて役場の担当者経由で地元の新聞社に伝わり、その新聞に準備号の URL が宣伝されたことがある。そして広報を見た住民の中でも、ケーブルテレビが通っている区域の人たちが他の区域と比べて高い割合でいたまぐへの登録を行ったとわかった。理由として広報誌を見るのは住民すべてに差はないが、いたまぐの URL を見て実際にインターネットにアクセスし、楽にストリーミングコンテンツを見られるほうが登録する強い動機付けになるためであると考えられる。

この現象を考えると、最初のきっかけ作りのための手段には現実として紙ベースのメディアが重要な役割を果たすことがわかる。また、町の広報誌が登録における一番の情報源になったことも事実である。デジタルドキュメントを流通させるために紙メディアを使うという共存形態についてより効果的な形を考えていくべきである。

(3) 公共性の強いメルマガで伝えるべき情報のすがた

メールは原則として１対１の個人間での情報のやりとりであり、ホームページは１対多といった個人から不特定多数の人間への情報伝達である。メールとホームページの間に位置するものとしてアクセス権つきの掲示板やメールマガジンがある。とりわけ本稿でとりあげているメルマガは、現時点では大学や役場が情報を送る側で住民が受ける側とすれば多対多であり、受ける側は登録した人間に限られるが誰でも登録すれば受ける側になれうという意味で、緩やかに閉鎖されたコミュニティといえる。また商品のダイレクトメールとはちがって、個人の投稿したビデオを共有しあうとしても営利目的はなく、公共性が強いメルマガである。そのような性格のコミュニティにおいてどのような情報の伝達形態やルールが必要であるかについては目下模索中である。

5. おわりに

いたまぐは９月に創刊号を配信したばかりであり、これからさらに継続して進めていかなければならない活動である。インターンシップ科目として発足したいたまぐであるが、登録ユーザが存在する以上責任を伴うものであり、大学や町役場の都合で容易に中断したりできる性質のものではないと考えている。履修する学生は交替していくが、メルマガ配信の活動自体は今年度に限らず来年度以降も継続して進めていく予定である。来年度には住民からのビデオの投稿をさらに活発化するためにオンライン投稿用のユーザインタフェースの作成や、ビデオを投稿したい住民にビデオ編集の知識を深めてもらうためのビデオ編集講習会なども積極的に大学と町役場の側から提供していくべきであると考えている。結語として、いたまぐは防災情報などのようななくてはならない情報を提供するわけではないが、やわらかな話題を伝えて地域のすがたを住民によりよく知ってもらうというコンセプトを大切にして進めていきたい。

謝辞

いたまぐの配信について理解を示してくださった板倉町役場の関係者の皆様に心より感謝の意を申し上げます。特に企画財政課の飯塚哲也氏と伊藤奈緒子氏には、多忙な中において学生の取材に休日も返上してつきあっていただいたり、さまざまなアイデアを熱心に議論していただいたり、配信準備から今日に至るまでなみなみならぬご協力を賜っていることに深謝いたします。

参考文献

［1］World Wide Web Consortium. W3C Synchronized Multimedia Home page. http://www.w3.org/AudioVideo/

［2］いたまぐ準備号サイト．http://itamag.itakura.toyo.ac.jp/